

大学教員という仕事について

NPO法人うつくしまNPOネットワーク

参与 荒井壽夫

▼全国的に広がったベトナム反戦運動や大学紛争の時代に高校生活を送り、社会や学問への哲学的な批判を感じていた。その後、地方の国立大学経済学部に入學する。そこで出会った魅力ある教授から美事な経済理論と経済構造分析を自分なりに学び取ることができ、自分も知的自立性をもった職業たる大学教員になりたいと考えた。

▼大学卒業後、旧帝大系国立大学大学院を修了して、国立滋賀大学の教員に採用された。国立大学に当時残っていた教員組織としてのいわゆる講座制（各専攻分野の教育研究を担う教授・助教授・講師・助手のヒエラルキー）により、私は講師として「労働経済論」講座に配属された。「労働経済論入門」という講義科目を担当した。研究業績と教育経験を積み上げ、教授会による評価・承認によって助教授・教授へと昇進した。

▼研究テーマとしては、戦後高度成長過程を主導した自動車産業の生産・雇用・労働構造の日仏比較、フランスの家族政策と日本の少子化対策との比較などを行った。研究者仲間と集団的討議を行い、納得できる論文を仕上げる事ができた時には充実感があつた。教育の面では、特に学部と大学院のゼミナール（演習）において、指導する学生・院生の専門的学習深化を確認し共有する事ができた時には幸福感が沸いた。

▼社会貢献の面では、学識経験者として滋賀県の公共政策にかかわる様々な審議会の座長に就く機会を得た。さらに故郷・白河市へのUターンが視野に入った教員退職前後には、地域・まちづくり政策とSDGsなどに関心が広がった。実は、大学教員の仕事は、2004年の国立大学の法人化以降、大袈裟に言えば、一変した。独立行政法人法が適用されて「選択と集中」を目指す競争政策のもとで、中期目標・中期計画の作成提出が義務づけられ、研究や教育以外のことで忙殺された。定年退職前に著作を上梓する計画を断念した。とはいえ大学教員として好きな研究と学生教育の機会を得て知的自立性をもった職業人生を全うでき、退職後に著作の上梓もできたことは幸せなことと考えている。

▼コロナパンデミックやウクライナでの戦争、ガザでの非対称的戦争の勃発など、世界の地政学的分断が進む。更に、エネルギーや食料危機、地球沸騰化・大規模自然災害という複合的な危機に直面している。しかしながら、これから大学や大学院で学ぶ若い学徒の皆さんには、人類の英知を結集したSDGsという世界変革目標と地球環境問題の根源的重要性を提起した世界共通言語があることをお伝えし、皆さんがこれを理性的武器として果敢に学びともに行動することを呼びかけたい。

(2023年12月24日記)